

國學院大學學術情報リポジトリ

伝慈円筆「千五百番歌合」恋二零本について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 荒木, 優也 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002370

伝慈円筆『千五百番歌合』恋二零本について

荒木優也

『千五百番歌合』は、後鳥羽院が建仁元年（一一〇一）九月頃に作者二十人を撰んで撰進せしめた百首を翌二年に結番した上で、十人の判者に判進を下命して成立した百首歌による歌合である。判進完了はその翌三年春と推定されている。本書の伝称筆者である慈円もその作者の一人であり、また判者も務めている。

國學院大學図書館に所蔵されている本書（貴1127）は、印籠蓋箱に太田晶二郎氏による解題と共に収められている。ただし、箱書にある古筆了音の極札は現在では伝来していない。筆跡は、高城弘一氏によつて慈円自筆ではないことが指摘されており、またいくつかの古筆切とツレの関係にあることが明らかにされた¹。書誌は以下のとおりである。

〈外 題〉ナシ

〈巻 冊〉一卷二帖

〈内 題〉ナシ

〈保存状況〉虫喰アリ。

〈体 裁〉綴葉装。枡型本。

〈書写年代〉鎌倉中期写

〈表 紙〉丸に菊花鶴文様金欄表紙

〈表紙寸法〉縦一五・六糎×横一四・二糎

〈見 返〉金銀箔砂子散らし

〈料 紙〉斐楮交漉紙

〈一面行数〉十二行

〈字 高〉一三・八糎

〈丁 数〉三折五九丁（うち遊紙前一丁後二丁）

〈書入・貼紙〉集付、校異、見消、擦消アリ。貼紙ナシ。

〈奥 書〉ナシ

〈蔵書印〉ナシ

〈箱〉枡型の印籠蓋箱。蓋面に「慈鎮和尚筆／戀歌合七拾三番 全／古筆了音極札有」と墨書する。

本文は、『千五百番歌合』卷十七恋二の千二百一番から千二百七十五番のうち千二百一番から千二百七十三番までを収め、千二百七十四番と千二百七十五番の二番四首ならびに判詞を有さない。また、本文冒頭には本来「千二百一番」と記されている筈が「一番」とだけあり、その下の部立名も本来「戀二」とあるべきが「戀一」と書かれている。これは、高城氏が太田氏の解題をもとにして指摘しているように、「一番」から「七十三番」までの上部に文字をすり消した跡があり、そこに本来存在した「千二百」という数字が摺り消されたからであろう。加えて「戀一」にも一画すり消された跡が見られる。これらの改竄は、現状を完本に見せようとして行われたものであろう。

現在、本書は三折で構成されている。一折目は計二一丁で、右側が二二丁（うち遊紙一丁）、左側が九丁、二折目は計一八丁で、左右ともに九丁、三折目は計二〇丁で、右側が九丁、左側が一一丁（うち遊紙一丁）を確認できる。一、三折目は左右で丁数が違い、いずれも外側の丁数が多い。その理由は、本書冒頭の三丁、末尾の二丁が料紙に貼付けられているからである。おそらく本書の本来の形は、現存する三折の前後にも何折かが綴じられていたのであり、冒

頭の墨付二丁、末尾の墨付一丁はそれら他の折の料紙として綴じられていたものが切られて、今日の形に改装されたものであろう。よって、本書は本来五折以上からなる冊子であったものと考えられる。

本文系統は、『千五百番歌合の校本とその研究』²⁾の底本である禁裡本本文に近いが、禁裡本と対立する高松宮本、桂宮本系統本文とも一致する箇所が多く見られる。具体的にいくつかの例をあげて見ていこう。

本書千二百八番の判詞末尾の本文「右の哥の勝にや」は、禁裡本本文と一致する。一方、高松宮本、桂宮本系統本文は「おなしほとにや」としており、歌の勝敗に違いが生じている。しかし、本書以外の伝本においては歌の前の「右」の下に「勝」の字が書かれていることから、判詞としては禁裡本本文及び本書本文の方が正しいことがわかる。また、本書は本文右側に「おなしほとにや」と傍書しており、高松宮本、桂宮本系統の本文と校合していることがわかるが、禁裡本も高松宮本によって同様の校合が行われているという（有吉氏前掲書）。ちなみに高松宮本は、本文右側に「右歌のかちにやイ」と異本注記が見られる。

次に、千二百卅三番の判詞を見ていきたい。

有吉氏前掲書では、禁裡本に見られる判詞の構成をABCDEに分けている。高松宮本、桂宮本はその中でABCのみを有す。それに対し、禁裡本系統の中でも陽明文庫蔵本、広島大学国文学研究室蔵本、島根大学文学部図書館蔵本、ならびに高松宮本、桂宮本系統の有吉保氏架蔵本、東京大学国文学研究室蔵本、水戸彰考館本、久曾神昇氏蔵本はBCを有さないADEという本文構成であり、本書はこのADEに近い本文である。有吉氏によれば、禁裡本は「ABCDの順序で書かれているが、CとDの間に六行分の空白がある。またBCの部分のみ一行十六字、十七・八字で書記されている。（底本の他の部分は、一面十二行で、一行に二十一・三字から二十五・六字が配されている。）随って、この部分BCは、例えば親本の貼付紙に記されてあった部分のごときものを本文に記し、本来の親本にな

かつた事を示すために、六行分の空白を残して区別したものとと思われる」(有吉氏前掲書)ということから、本書は禁裡本親本に近い姿を伝えられると考えられる。本書と近似するDE本文は、いずれも近世以降の書写本に見られる本文のため、これまで重視されてこなかったきらいがあった。しかし、本書によつて鎌倉期にさかのぼれる本文であることが明らかになったため、DE本文は『千五百番歌合』の伝本形成過程を考えるとときに注目すべき本文になったと言えよう。

また、千二百廿八番の判詞は、結論を「なすらへ可申歟」とする。この「可申歟」を高松宮本、桂宮本系統の本文では「申へき歟」と書くのに対し、禁裡本では本書同様「可申歟」とする。ただし、禁裡本は「なすらへ」を「なすらへて」とするのに対し、桂宮本のみ本書同様「なすらへ」の本文であることから、本書が必ずしもすべて禁裡本に一致する訳ではないことが指摘できる。

桂宮本と本書が一致する箇所は他にも見られる。千二百九番の判詞では、本書に見られる「河のみなかミのたつねたり又海渚の人も槎(様)にのりて」の一文が禁裡本本文には見られない。一方、高松宮本、桂宮本系統本文には「河の水上をたつねたり又海渚の人も槎にのりて」と、「の」と「を」に異同はあるが、この一文が見出せる。これは、禁裡本本文に誤写の箇所が多く見られ、その誤写が多く高松宮本、桂宮本系統本文によつて修正出来る点、また、本書がその誤写箇所が多く高松宮本、桂宮本系統本文と本文が一致する点を考え合わせると、目移りによる脱落の可能性が考えられよう。禁裡本の誤写の例をあげると、千二百廿五番の判詞では、禁裡本において「長永」という年号が見られるが、このような年号は存在しない。それに対し、高松宮本、桂宮本系統本文および本書では「長承」となつており、こちらが正しい。

以上のことから、本書は禁裡本本文と同一系統の本文を有しつつ、禁裡本の本文を修正出来る本文であると言えよ

う。加えて、本書が『千五百番歌合』の成立時期に近い書写であることも重要な要素であろう。ただし、本書も禁裡本と同様に誤写が多く見出される。

例えば、千二百九番判詞の三行目は「と侍哥のかこの哥にハ」と記されているが、文意が通じない。一方、他本全が「と侍歌の心か此うたには」という本文であることから、他本によつて「心」を補うと文意が通じる。このように本書には一部欠脱が生じている。また、千二百十五番は左右の歌が入れ替わっている。左歌になっている二四二九番歌の歌の左頭に印があることから、筆者はその入れ違いに気がついていたようであるが、訂正はされていない。親本からこのような配列になっているのであろう。

また、本書には独自異文も確認できる。千二百五番左（二四〇八）「かくしつゝうき秋しなはありしよのゆめをはかなみあはれとをみよ」の二句目は、他本では全て「うき身消なは」であり、本書のみ「うき秋しなは」の本文とする。他の歌書においても見られない本文であるが、誤写によつて生じた違いとは考えにくい異同である。ただし、「うき秋しなは」の本文で読むと、「秋」が歌の中でどのように機能するのかがわかりにくく、他本の「うき身消なは」の方が歌としては完成度が高い。

本書は、全体にわたつて誤写が見られることから、本文を用いるには注意を要する。しかし、禁裡本親本を復元し得るといふ点から考えれば、本書は『千五百番歌合』本文の研究にとつて重要な伝本といえるであろう。

爰に翻刻して紹介する次第である。

注

(1) 高城弘一「伝慈円筆『千五百番歌合』零本と断簡——國學院大學図書館蔵貴重書を中心として——」（『國學院大學図書

館紀要』一〇号、二〇〇〇年二月)。

(2) 有吉保『千五百番歌合の校本とその研究』(風間書房、一九六八年四月)。「千五百番歌合」諸本の本文はこれによつた。

【凡例】

- 一 以下は、國學院大學図書館蔵『千五百番歌合』一帖(貴1127)の翻刻である。翻刻に際し、次のような措置を施した。
- 一 歌頭に『新編国歌大観』の歌番号を付した。
- 一 漢字、仮名ともに通行の字体に改めたが、「哥」など一部原本の字体を尊重した箇所がある。
- 一 使用した記号は左記の通りである。
 - (左傍直線) …… 見消
 - ~~~~ (右傍浪線) …… 擦消 () 内はもとの文字、() がないものは不明。
 - (右傍直線) …… 重ね書 () 内はもとの文字、() がないものは不明。
 - …… 墨減 () 内はもとの文字、() がないものは不明。
- 一 原本に見られる挿入記号は・に統一した。

【翻刻】

一番 戀一 判者頭昭

左 女房

2400 なかむれハこぬ人またるわひつゝも
こよひの月にあかすかもねん

右 釋阿

2401 せきわひぬあふせもしらぬなミた河
かたしくそてやゐてのしからみ

判申云左哥八月よにはこぬ人また
るかきくもりあめもふらなん

わひつゝもねんと申哥の心にこ
そ侍ぬれあめもふらなんの詞を

すてゝひとへにこよひの月にあかす
ねんと侍るおそしの小月らくハをもてあ

そふ心もふかくなりて本哥より
もまさりてこそきこえ侍めれ

右哥八万葉哥にたまもかるて

「 2オ

のしからみうすきかもと侍哥の一句

をとりてゐてのしからみとおかれたる

は心たかきに上旬ハ金葉哥にあ

さましやあふせもしらぬなとり河

またきにいまはもらすへしやハと侍
哥にかよひてあふせもしらぬなミた河と侍る
・わたりあさやくやきこえ侍らん

左哥は本末ひとすちに戀情高の

すかたをこのまれて侍れハ左哥は
勝と可申侍

二番

左 左大臣

2402 したもえのなにやはたてんなにはなる
あしひたくやにくゆるけふりを

右 俊成卿女

2403 なつ衣うすくや人のなりぬらん
うつせミねのはにぬるゝ袖かな

左哥八万葉になには人あしひたく

やはすゝくれとおのかつまこそとこ

「 2ウ

めつらなれと侍哥によせてあしひ

たくやにくゆるけふりの我した

「3オ

もえのなにたてん事などおかれたる

ほと優艶にこそきこえ侍れ右哥は

せミのこゑきけはかなしな夏衣う

すくや人のならんと思へると侍哥を

上下句にとりてちかへられたるにや(にや)

うつせミのねにぬれん袖よりもあ

し火たくやのけむりたちまさり侍らむ

三番

左 前権僧正

2404 ありあけやこやなか月のそらたのめ

まちいつる月のかきくらすまで

右 丹後

「3ウ

2405 ときしらぬこひはふしのねいつとなく

たえぬおもひにたつけふり(前権僧正)かな

左哥ハいまこんといひしはかりにな

か月のありあけの月をまちて

つるかなとよめる素性哥によせて

そらたのめにまちいつる月を

かきくもらせられたるさもときこ

え侍り右哥は伊勢物語に侍時

しらぬ山はふしのねいつとてかかのコまたら二

ゆきのふるらんとある哥を思て

やまはふしのねを戀はふしのね

とかへられ(る也)たるこそかゝるすちの

「4オ

哥にとりてはあしくも侍らねと

哥合などにはいかゝ侍へからん左哥

をまさると申すへくや

四番

左 公継卿

2406 なみあらふいはにもまつハおいにけり

とおもふはかりをなくさめにしして

右 越前

2407 いはかうへのおひぬるまつのたねをのミ

たのむはかりのなくさめそなき

左右哥ともにたねしあれはいは

にもまつはおひにけりこひを

し戀はあはさらめやもと侍

哥をおもはれて詞も同様にハ侍

めり終句そかはりて侍れとも

それもとりくなれハおとりまさ

り申かたきや

五番

左 公経卿

2408 かくしつゝうき秋しなはありしよの

ゆめをはかなミあはれとをみよ

右 定家朝臣

2409 ゆめなれやおのゝすかはらかりそめに

つゆけし袖はいまもしをれて

左哥ハいせ物語のねぬるよの夢をハ

かなミまとろめはと侍哥の詞を思は

れたるにやあはれにきこえ侍右哥ハ

思はれたるすち侍る哥にこそおほつ

「 4ウ

かなく侍但若源氏の物語に北山の

旅ねに紫の上のうはの尼公にあひ

てはつ草のわかはのうへをみつる

より旅ねの袖そつゆもかはらぬ

と侍哥やあて詞も侍りその事の

ありやうなどを思はれたるにや

おのゝすかはらなども北山の旅ねた

よりありてやこの事くもをはか

りの事に侍哥合ハたしかなる

へければそのほとゝうけ給程左可勝

六番

左 季能卿

2410 さもあらハあれうき身のほとやしらせまし

いはてやむへきものおもひやは

右 通具朝臣

2411 我こひはあふをかきりのたのミたに

ゆくゑもしらぬそらのうきくも

左哥詞もかさらす心におもふまゝに

「 5ウ

「 5オ

いひのへられたり右哥我戀はゆ

くゑもしらすはてもなしあふを限

とおもふはかりそとよめる躬恒か

哥をおかしきさまにハとりなされ

て侍れととちむる句の空の浮雲の

詞いかゝときこえ侍れハ左まさるへ／くや

七番

左

宮内卿

2412 身のほとにつゝむといはゝおのつから

いとふになりぬこひすしもあらし^す

右

家隆朝臣

2413 おもへとも人のこゝろのあさちふに

おきまよふ霜のあへすけぬへし

左歌ハ月よしよゝしと人につけ

やらん^はこてふにゝたりまたすしも

あらずと侍心をこひねかひて月を

こひになしましたすしもあらずを

戀しもあらずといひかへられたるに

「6オ

「6ウ

こそ右哥はありつゝも君をハ

またんうちなひき我黒かみに

霜おきまよひといへる終の詞を

おきまよふ霜のとよみなされて

またひるはおもひにあへすけぬ

へしとありおはりの詞をひき

うつされたりともにちからはいり

て侍れといつれさたかに勝負へしと／ハ

申かたきをや

八番

左

讚岐

2414 ふけにけりこれやたのめし夜ハならん

月をのミこそまつへかりけれ

右

雅経

2415 あはれともいつかは人にいはれのゝ

いはれすかゝるそてのつゆかな

右哥ハ後拾遺に侍る江・従か月^みあ

れハやまのはたかの成^くにけりいては

「7オ

といひし人につけハやとよめる事

思いてられ侍り右哥にいはれのと侍ハ

「 7ウ

古今哥にうつらなくいはれのゝへの秋

はきを思ふ人ともみつるけふかな

と侍に万葉にはうつらなくふり

にしさとのあきはきと侍はおほつ

がなく侍りその哥ならて侍にやた

しかにかむへかへられ侍へし後拾遺に

良暹か哥にいはれのゝはきの白露

わけゆけは戀せし袖の心ちこそす

れと侍はふるくもよミて侍にこそい

かさまにも右おなしほとにやの哥の勝にや

九番

左 小侍従

「 8オ

2416 あさましやくやくは物をおもふへき

われつらからは人はしのはし

右 寂蓮

2417 おもふ事ちえのうらわのうきゝたに

よりあふすゑはありとこそきけ

右哥ハ万葉に秋風のちえの浦わ

のこつミなる心はより又ぬのちは

しらねと侍哥のかこの哥にハうき

木と侍り万葉には木積と侍り

こつミとはなみにうかへる木のえた

などのしほにひかれてうらくくになか

れよるを申すにこそ万葉には又

よめりほりゑよりあさしほ道

によるこつミかひにありせはつと

にせましをされハこつミとよまれ

すしてうきゝとよまれんハ本哥に

やたかふへき又法華経にハ一眼のか

めのうきゝのあなにあへるかこと

しとゝけりかのかめいるはかりの

あなあらは浮木もちいさからし

又張騫うきゝにのののりて河のみな

かミのたつねたり又海渚の人も

「 8ウ

槎(様)にのりてあまのかはへいたり

てたなハたひこほしにあへりと

「9オ

いへり小大君か哥にもあまの河浮木

にのれるわれならばきみかあた

のにけふそきなましとよめり万

葉の木積をさへてうき木とよ

まんことはいかゝ又おもふ事ちえの

うらわとつゝけられたるは菴主

か哥に我思ふことのしけさにくらふ

れハしのたの杜のちえはものかはと

侍はちえたと申す事なりちえの

うらわにはことにたかひたれは

只ちえのうらとよめる名はかりによ

せたるなるへし哥合にハかゝる

みえしをきて侍に左指とか侍(侍)らねハ

勝と申へし

十番

左 隆信朝臣

2418 あさゆふにうきおもかけをミなれさを

さすかにさてもなくさミやせん

右 家長

2419 ゆめにたにみるめもなくてあくる夜の

かへすころものそてのうらなミ

左哥ミなれさをさすとはかりにて

たかせふねなどにもよせられぬいかゝ

とおほえ侍れとふるくはさのミこそ

侍めれあつさゆミおして春雨けふり

ぬあすさへふらはわかなつミてんなど

も侍めり右哥はしめおはりよむ

へきふしみなよまれては侍れとゆめ

によせてよるの衣をかへしそての

浦浪にかけてみるめなきよしを

よまれたりことひとすちならねは

なを左勝ぬへし

十一番

左 有家朝臣

「10オ

2420 としふともなかれてこひんつらしとて

さてや八人をやまかはのみつ

「 10ウ

右 三宮

2421 よとゝもにうき人よりもつれなきハ

おもひにきえぬいのち成けり

左哥ハ山たかミしたゆく水のしたにのミ

なかれて戀んこひはしぬともと侍哥

の詞をとられたりとはミゆれとき

てやは人を山河水と侍あさきさま

なるへくや右哥ハはしめおはり

あひかなひ心詞たしかによミすゑ

られて侍めれハうたかひなき勝

には侍めり

十二番

「 11オ

左 保季朝臣

2422 おもひやれ草にもあらず木にもあらず

たゝやは袖につゆはおくへき

右 内大臣

2423 みしゆめをしのふる雨のもらさハや

うつゝともなき袖のしつくを

左歌ハ木にもあらず草にもあらぬ

竹のよのはしに我身ハなりぬへら

なりと侍哥ハ竹をは木にもあらず

草にもあらずとよミて侍りその

かしらむねの句をとりてけふの哥

のむね腰におかれて侍か本哥

よりはしなゝき様にきこえ侍は

ひかおほえにや侍らん右哥ハ源氏の

哥にはむへるみしゆめをあふよあ

りやとなけくまにめさへあはてそこ

ろもへにけるとある哥の心にやた

とひその本哥ならずとも哥すかた

もよろしきさまなれハ勝と申へし

十三番

左 良平

2424 いけ水のつかはぬをしのうきまくら

「 11ウ

ならふかたなきこひもするなりか

右 忠良卿

「12オ

2425 人もうくわれもくやしきなくさめハ

よゝのちきりのむくひなりけりハかりそ

左歌ふるきやうをこひねかハれて

ひとふしよまれたるさる事とみえ

侍り右哥つれなき戀のなくさめ

によゝのちきりまで思われられて侍

り心さしとりくゝに侍れハ持と可申歟

十四番

左 具親

2426 いまはとて思たゆへきまきのとを

さゝぬやまちしならひなるらん

右 兼宗卿

「12ウ

2427 きミをのミひとへにしのふなつ衣

さてもうらなきかひやなからん

右哥ハきミやこむわれやゆかんのいさ

よひにまきのいたともさゝすねに

けりこの哥を思はれて宜侍り

右哥ハ夏衣によせてひとへにうら

なしとはめつらしけなくや左を

勝と申へし

十五番

左 顕昭

2429 いにしへはしちのはしかきもゝよとも (歌左頭に印)

たのむれはこそそれにつけても

「13オ

通光卿

2428 さりともなよしたゝにてはやましろの

いつみのこすちけいつかあひミン

左哥ハやましろのいつミのこすけよそ

なミにいもか心を我思カはなくにと侍

万葉の哥をは思て侍れと下句のい

つかあひミンなど心よくも覺侍ら

す右哥ハしつちのはしかきもゝよなど

よまれたるは春ふるくよりきたれる

ことなれハはしめて申すへからす

天徳四年内裏哥合に平兼盛か

哥にひとへつゝやえやまふきはひら

「 13ウ

けなんほとへてにほふはなとたの

まんと侍を八判云やえやまふきの

ひとへつゝひらけはひとへやまふきに

こそ本意なくやあらん又上句の

はてのはてのもし下句におなし

文字ありとて負侍に同哥合に

小貳命婦哥に足引の山かくれなる

さくら花ちりのこれりと風にしらす

など侍哥をはいとをかしくてさてもあ

りなんとて勝侍ぬされハ同病なれと

勝負ハ哥の善悪もしハ難の有無

によるか心えられ侍れハ右哥可勝侍

「 14オ

十六番

左 女房

2430 君はしるやまつよあまたにつもりきて

袖にあまりて月をみるかな
アケノ トモ

右 俊成卿女

2431 いろかはるこゝろのあきのとときしもあれ

身にしむくれのおきのうは風

右哥上句にまつ夜あまたにつも

りきてと侍柿下人丸かたのみつ

つこぬよあまたとよめる詞を思で

られ侍り下句ハ伊勢哥の御本こかにあひか「に(後筆)」

あひて
・てももの思ふこゝろそ我袖にやとる

「 14ウ

月さへぬるゝかほなるとよめる

哥おもかけにたち侍に袖にあ

りあけの月をみるともとさへ侍る

いよく月前戀きはまりぬること

にこそ侍めれ右哥色かはる心の秋

も身にしむくれのおきのうは風もや

うかはりてたゝならず侍れハ右の

袖も露おきぬへくや持と可定申歟

十七番

左 左大臣

2432 こかくれて身ハうつせミのからころも

ころもへにけりしのひくくに

右 丹後

「 15才

2433 わりなしや露のよすかを尋きて

ものおもふそてにやとる月かけ

右哥しきしまやゝまとはあらぬ

から衣くへすしてあふよしもかなと

申哥ハ貫之か詠也この右哥ハ後撰

にわすらるゝ身ハ空蟬の唐衣かへすハ

つらき心成けりと侍哥又伊勢か

集に侍哥の源氏にもいれる哥空蟬

のはにおく露のこかくれてしのひくくに

ぬるゝ袖かな是等の心にておもしろく

よミ被成て侍にこそこかくれて身ハ

空蟬の唐衣とおきて衣へにけり

しのひくくにと侍めつらしさめも

およはすこそ侍れ右哥露のよす

かと侍源氏の詞にあさからぬよすか

にかけてなといへる詞ハ侍るにや哥も

哥もかはるらん万葉にはしかの彼山

いたくなきりそあらおらかよすかの

やまとみつゝしのはんと侍りまひこ

ひめか和調式にはあひみるめなき

まのしまにこそけふよりてあまそて

みちぬよすかなミなりこれらみな

いかなる詞とは心しられ侍なん此哥

の心もたかひ侍らす哥さまも露の

よすかなと哥めきて侍と下句ふるく

や左勝歟

十八番

左 前権僧正

2434 いかにとよこひしき事をよしなやと

おもひはつれハものわすれして

右 越前

2435 あふ事はかたやまさしきしのいはのうへに

いつをまつとてふるみなるらん

「 16才

左哥ハ昔へに猶立帰心哉戀しき事

に物忘^せして是ハ貫之詠に侍けふの哥

「16ウ

の下句ハ此哥の二句をとりてけふの

三句をおかしく詠そへられて侍かおかし

くよミなされぬれは撰集にも罷入侍歟

右哥ハ万葉哥にあさつまの・きしと申^{かたやま}

哥の詞をとられて侍れと終句なを宜

からねは左哥ハ勝侍なん

十九番

左 公継卿

2436 ふちはかまゆめちはさこそかよひけれ

あふとみるよのうつりかもなし^{かな}

右 定家朝臣

2437 たつねみるつらきこゝろのおくのうみよ

しほひのかたのゆふかひもなく^し

左哥ハ鄭文公か家に賤妾あり其名

を戀^燕姫といふ夢に天使来て蘭あた

へて云是を汝か子とせよといへり夢さ

「17オ

めて後にうめるこを蘭となつくとい

へりこの事をよまれたるなるへし

右哥ハ伊勢より御息所の源氏のも

とへたてまつれる哥云いせしまやしほ

せのかたにあさりてもいふかひなきハ

うきよ成けり此哥のいせしまをかへて

つらき心のおくのうミとなされしほひ

の方にあさりてもいふかひなきハうき

よとあるをしほひの方のいふかひもな

しとかへられたりうき世の詞をす

て、戀の哥につくられたるなるへし

左の燕姫か蘭の夢いますこし哥めき

てにほひふかくきこえ侍れハまさると

廿番

申へし

左 公経卿

2438 なかめわひうはのそらなる月かけに

みをうきくもそいと、かなしき

右 通具朝臣

「17ウ

2439 あふとミておもひあはせぬゆめにさへ

ハかなかりけるちきりしれとやな

「 18オ

左哥ハうはのそらなる月をなかめ

わひて身のうき雲を馱右哥ハあふと

みる夢のむなしきにはかなき契をし

れるほとも宜きこえ侍れハ同程と可申

廿一番

にこそ

左

季能卿

2440 しらせてはなか／＼こひやまさるへき

いはぬにつらき人しなけれハ

右

家隆朝臣

2441 おのつからたのむるゆめハむなしくて (歌頭に印)

いつかうつゝのこひはさむへき

左ハ心はへおかしくよまれたり
右哥夢ちなどよミてよせある詞や

「 18ウ

聊も勝へきされハふるくも夢ちに

も露や置らんよもすからかよへる袖の

ひちかほかぬなとこそ詠たれ左勝／歟

廿二番

左 宮内卿

2442 これも又あはれいつまでなけれん (歌頭に印)

かはらぬたにもかはるこゝろを

右 雅経

2443 さきの世をおもふもうしや人こゝろ

つれなかれとはちきりしもせし

左右詠おもひまに心をつくされた

るにとりて右哥ハ聊おほつかなき

「 19オ

ふしこそ侍れつれなかれとちきらすハ

さきの世を思ハんもなにかはうかるへき

せめて思ふあまりにこそ古哥にハさき

の世のちきりをしらははてはかなくも人を

つらしと思けるかなと思人も侍物を

されとちゝやちくさに思ミたるゝ心のうち

をはひとすちにしつめ思ふともかなひ

かたし人の心／＼ハたゝおなし事と申侍へ

廿三番

きにこそ

左 讃岐

2444 ゆめにたに人をみよとやうたゝねの

袖ふきかへすあきのゆふかせ

はつ

「 19ウ

右 寂蓮

2445 いせのうみのしほせになひくはまをきの

ほとなきしほになにしほるらん

左哥ハ万葉にしろたへの袖おりかへし

こふれはかいもかすかたの夢にしミゆると

いふ哥の心を思て袖ふきかへすとよま

れたる直侍り國信卿の哥合のとき

夜戀に隆源法師か戀わひて片敷

袖ハかへせともいつかハ君か夢にみえけ

るとよめるをは其時の哥仙ころも

かへすとおなし事かなとおほめき侍け

るも万葉哥たしかにもおほえさりけ

「 20オ

るにや右哥ハ神風やいせの濱をきおり

ふせて旅ねかすらんあらきはまへにと侍

哥の心にこそ但上句しほせ下句にしほる

とよめるハあらぬ事なれとあま人ワ(ハ)たつ

みなどによせてハ袖のぬるゝをしほたる

などそへよむ事なれハたゝの文字病

よりはみゝにたち侍ぬへし源氏の

哥にはしほくとまつにてかゝるかりそめ

のみるめはあまのすさひなれともとよ

めり左勝にや

廿四番

左 小侍従

「 20ウ

2446 ちきらすなまくらにとめんうつりかを

たえなんのちのかたミなれとは

右 家長

2447 わひつゝはおなし世にたにと思ふ身の

さらぬわかれになりやはてなん

左哥枕にとむるうつりかのたえて

のちのかたミとならんもなさけふかく

こそおほえ侍れ右哥ハ五郎中将業平

の君か母のみこなかおかにすミける時

とミのほとゝてふミをもてきたりことく

はなくておひぬれハさらぬわかれの

ありといへハいよ／＼みまくほしき君かなと」 21オ

よめる哥をこのさらぬわかれよめるはしめ

とおほえ侍ひとことはおとれるも心ほそく

きこゆれハ左右の袖にあハれも懸侍へ／し

廿五番

左 隆信朝臣

2448 いしかハやせミのおかはのなかれにも

あふせありやとみそきおそする

右 三宮

2449 もの思ふこゝろのうちにやとりきぬ

ふしのたかねもむろのやしまも

左歌ハ左大臣家の百首哥合に祈

戀にいしかハやせミのおかはにいくしたて」 21ウ

ねきひあふせは神にまかせつとよめる

哥ハへりきその作者達定おほえられ

侍らん但長承のころをひ顯輔卿哥合

に戀わひておつるなミたの玉ならハちハ

このこすもつきやしなまし藤雅親か

哥也そのゝち保延のころ家成卿哥

合にきミこふるなミたのたまをぬきお

きてもゝくるまにもつミてみせハや藤宗

國哥基俊判云さきの哥合に涙の

たまちはこの哥あり今の哥合にな

ミたのたまもゝくるまの哥ありわすれ

て詠するにてこひねかひてよめるにて／も」 22オ

千箱百車同事也古哥二度詠ハ哥合に

ゆるさぬ事也遼東のゐのこにたとふへ

しといへり然者此左哥既このとかをおか

せり右哥・無疑勝に被定侍へきか

廿六番

左 有家朝臣

2450 かりそめにむすふさゝやのあまそゝき

ひとよのほとももるなミたかな

右 内大臣

2451 しのふれとよそめやいかにあさてあらふの

たらひの水の(て) かけもはつかし

左哥ハ催馬楽哥にあつまやの・あままの

「 22ウ

りあまそゝきわれたちぬれぬと

のとひらかせとうたへるをむすふ

さゝやのあまそゝきとよみなされたる

有興歟右哥ハ世俗のくちすさひに

あさてあらの手ふ洗面にかけミれハ戀

に我身ハおもや(へか)せにけりこのたわふれ

ことにかよひて侍るにつけてもおかし

くは侍り但はれの哥合にもかやうの

戯咲哥ハとりいつる事もふるく侍め

り寛平太上天皇御時后宮哥合に

いくはくのたをつくれはかほとゝきす

してのたをさをあさなくよふ藤

「 23オ

敏行哥あき風にほころひぬらし藤袴

つゝり・せてさふきりくすなく在原棟梁

是を案侍に左ハひきつくろへるさま

をこのミ右ハおかしき心にほこれりいつ

れをすていつれをとるへからす侍

廿七番

左 保季朝臣

2452 おもふ事しのへといまはなとりかは

せゝのむもれきあらはれやせん

右 忠良卿

2453 ねられぬはまくらもうときこのうへに

われしりかほにもるなミたかな

左哥ハなとり河せゝのむもれきあら

はれハいかにせんとかあひみそめけん

此哥の上一句を取てけふの哥の腰

よりと三句におかれて侍めり初の

二句ハかりあたらしく侍歟右哥ハ我

戀を人しるらめやしきたへの枕のみ

こそしらはしるらめと侍哥につきて

ねられねは枕もうときこの上にとは

よミおかれて我しりかほにもる涙哉

と侍下句おかしく侍れハいつこふるしと

「 23ウ

申すへからす古哥の枕はかりそしらは

しるらんと侍詞につきて枕もうとき

「 24オ

となされたるはかりなれハよきあた

らし哥なれハ勝と定申侍らん

廿八番

左 良平

2454 なこりにはぬれこそまされさよころも

かへしてきつる夢のあけほの

右 兼宗卿

2455 いとふともおなしよにこそすむらめと

おもひはかりそたのミなりける

左右哥ともに風情ハよくとられて侍に左

は下句不宜右ハ腰句すむらめと

侍詞やいますこし思はるへく侍らん

「 24ウ

同程となすらへ可申歟

廿九番

左 具親

2456 ほしわひぬおもひしのたふのもりのつゆ

ちえにくたくくるたまくらのそて

右 通光卿

2457 うつせミのひとへもいへはなにならす

身をかへてやはしのひはつへき

左哥ハさきにもしるし申つるいほ

ぬしか哥しのたのもりのちえはものか

はと申哥のすこしひきなをされ

て侍にこそ又思しのたのつゝきは

「 25オ

さきにもおとろかし申侍又右哥ハ

源重光卿のせミのもぬけを女の

もとへつかはすとて是をみよ人もと

かめぬ戀すとてねをなく虫のなれ

るすかたをとよめることのはを思ひあハ

せられていとあはれにこそおほえ侍

れ勝と申すへし

卅番

左 顕昭

2458 いとひつるきミはかりやはうきぬなは

くるしき物をたえぬうらミは

右 釋阿

「 25ウ

2459 いくとせになれこしとこのふりぬらん

つけのまくらもこけおひにけり

左哥うきぬなはにかけてたへす

くるしなとそへよむハものすそより

落たる古事なれはめつらしき侍

らす右哥ハ上句よのつねならすたけ

たかくみえ侍うへにしもの句は万葉

にゆひしひもとかん日とほみ・しきたへ

のわかきのまくらこけおひにけりと侍

哥など思出られて侍は左哥負侍へし

卅一番

左 女房

「 26オ

2460 うらみよとなれるゆへのけしきかな

たのめぬやとのおきのうは風

右 丹波

2461 なか／＼にこひてそまよふあふ坂の

せきのあなたやこひちなるらん

左哥ハ一篇に金をちりハめ五句

にたまをつらぬけり心詞共相叶天

ほめ申におそれふかしも侍かなことをうしなへり右哥は

心ちわりなく侍に聊いきとおるところ

相交れり中／＼にこえてまとふといは、

関のこなたとそよミ侍へきおそくいづる

月にもあるかな足引の山のあなたも

おしむへらなり是八月のいてやらねハ

かくよめりみよしの、山のあなたに

家もかな世のうき時のかくれかにせんこ

れも山よりこなたにてよむ心也されハ

こえて関のあなたにまよふとハ申すへ

からす作者も能々思はるへし左可勝／申

卅二番

左 左大臣

2462 ゆきかよふゆめのうきにもまきるやと

うちぬるほとこのこゝろやすめに

「 26ウ

右 越前

2463 秋かせに思ミたれてくやしきは
 きミを^なあらしのおかのかるかや

「 27 オ

左哥ハ戀わひて戀わひてうちぬる

中にゆきかよふ夢のたゝちはうつゝ

ならなん此哥の心を終句におもはせて

いひさして侍か右哥はふるさとのなら^しの

岡の郭公と侍哥二つきてならしの岡の

かるかや秋風に思ミたれてくやしと

ハよくこそよミくたされて侍れあまり

たくみにきりくまれて岡のかるかや

なともしなかおくれてきこえ侍らん山と

哥ははかなきさまにて思へる所みえたる

いみしき^しなに侍れハ左勝にこそ侍めれ

「 27 ウ

卅三番

左 前権僧正

2464 なくさめぬ^{ムル}ときこそなけれ月やあらぬ

あきやむかしのおきのうはかせ

右 定家朝臣

2465 人こゝろかよふたゝちのたえしより
 うらミそわたるゆめのうきハシ

左哥ハいせ物語に月やあらぬ春や昔

の春ならぬ我身一はもとの身にしてと

侍哥の心をおしはかりて秋の心にひ

きうつしてなくさむる時こそなけれ

とよミおかれて秋や昔の萩のうは風と

「 28 オ

侍まどにたくみに侍心もおよはぬ風情

に侍ぬへし大方は詩も哥も^{時にしたかひて}・そのすかた

かはる事にこそ侍めれ漢より巍

にいたるまで文躰三たひかはると侍

めりされハ杜伯山か古文時勢にか

なはずとてつねの様をかうこふる事

も侍りやまと哥も如此古今序にハ今

のよのなかいろにつき人の心花に成

にけるよりあたなる哥ハはかなき

事のミいてくとかけり又そのみゝなれ

はならのみかとの万葉哥より後延喜

の御よ古今の哥などはかはりて侍にや

「 28ウ

況其後いまのよになりきはともかく

もかはり侍らん事たゝ人の心にまかせ

侍へしふるきをのミほめいまをそし

るへからす左哥の心たかさも右哥の世

のつねめきてけちかく侍もいつれに

つくへしとも思え侍らす哥合に持の

つかひ侍事なれハさやうにてこそ

侍へけれとなをうるハしきにつきて

卅四番

右勝歟

左 公継卿

2466 いかてわれしのひになるゝうつりかの

たえぬにほひを袖にかさねて^ん

「 29オ

右 通具朝臣

2467 あかつきのところは草はのなになれや

つゆにわかれのなミたおくらん

左哥上句のうつりかと下句のほひ

とはおなし心病にて侍に六条右大臣

家哥合わかやとのな橘のほひ

にはひとりぬるよもうつりかそす

ると侍哥かちて侍りとてやまひあれ

と勝よしのせうこの哥にいたして侍れ

ともくはしくそのよしをしるさねは

おほつかなし此哥ハやまひありとも

つかひの哥むけにわろくや侍けん

「 29ウ

判者の心はかりかたし右哥ハ一人ぬる

とはくさはにあらねとも秋くるよ

ひは露けかりけり此哥のほとはお

とりてやさしくも侍らねは左哥やま

ひによりてまけ侍なん

卅五番

左 公経卿

2468 おきのはにつゆのかことをむすはすハ

風をもひと^もをたれかうらミン

右 家隆朝臣

2469 おもひいてよたかゝねことのすゑならん(歌頭「新」)

きのふのくものあとのやまかせ

「 30才

左調は源氏物語哥にほのかにもつき

はのおきをむすはすハ露のかことを

なにゝかけまし右哥ハおなしものかたり

にみしやとのけふりを雲となかむれハ

ゆふへのそらもむつまじきかな若此

哥の心かさらぬにても左哥のかこと右

のかねことたゝおなししなにてや

卅六番

左 季能卿

2470 なにとなくよなく袖のしほるらん

おもへはたれか心なりしそ

右 雅経

「 30才

2471 おもひわひおつるなミたのたまことに

くたきはてゝもあるこゝろかな

左哥ゆへなきにあらず思へる所ハいひ

のへられたり右哥はあはゆきのたま

れはかてにくたけつゝわか物思のしけ

きころかな又源重之か哥にも風ハや

みいはうつ浪のおのれのミくたけて物を

思ふころかなか様の心ともくたけて物

をもふ心になミたのたまのくたくるよし

をよミそへられて侍かいつれまさるへし

ともおほえ侍らねと左哥ハ結句心なりしそいかにちからいれられ

て侍めれハそや侍れハ右哥勝侍なん

卅七番

左 宮内卿

2472 あくるたにをしまぬ物をくれハとは

こゝろのほかのそらたのめかなは

右 寂蓮

2473 なみかくるあしまによつてにほとりの

うきしつミてもぬるゝ袖かは

右左哥後朝の歌にてハさる心も侍ぬへ

し右哥にほりとのうきしつみてぬ

るゝ袖も哥さまあしくもきこえねと

「 31才

左ハ思入れて侍り右ハ世のつねの事

にてや左可勝歟

卅八番

左 讚岐

2474 ふか草の野へのうつらよなれハなを

かりにはとたにまたぬ物かは

右 家長

2475 なかめわひぬひとりあり明の月かけに

あはぬかすかのしきのはねかき

左哥ハのとならほうつらとなきてとし

はへむかりにたにやハきみかこさ覽

といふ歌を思へり右哥ハ暁のしきの

はねかきもハかき我そかすかく君かこ

ぬよはと侍り左ハ我やとあれてのへと

ならはわれほうつらの様になきて年へむ

とよめるをそのあらましことこのうつらを

かりにはとたにまたぬ物かはとよめり

右ハ君かこぬよのかすをしきのもハ

「 31ウ

かきの様にわれハかすをかゝむする様

にあはぬかすかくしきのはねかきと

よまれたりふたつにとらはうかはツラはにな

らんと人のよミたれハさもよみつへし

しきのかすかくことはなけれハいかゝ左ハ

いますこしたよりや侍らん勝と申へくや

卅九番

左 小侍従

2476 たのむともいまはたのましあふ道の

しのゝをふゝき人はかりけり

右 三宮

2477 さのミやは人のこゝろにまかすへき

わするゝくさのたねをしらハや

左ハ催馬樂に逢道のしのゝをふゝき

はやひかすこもけまちやせぬらんしのゝ

をふゝきと申哥につきてよめるなるへ

ししのゝをふゝきとは風のなと申つ

たへたりこもちまちやせぬらんと

「 32ウ

いふ詞につきて人はかりけりとは

よめるにこそそれをしはかりにや

たしかに詞ことにあきらむることはいかゝ

神樂風俗催馬樂などの哥ハふるき哥

にて心えやすき事もあり又古語など

ましりゆへありて何事と申あきら

むへくもなき事をほかくとこそはよ

ろつのみちしりくゝりたる人く申侍れ

・俊頼朝臣竹風如秋と申題ニあきゝぬとたけのそのふに
右哥ハいまはとてわするゝ草のたねを
なのらせてしのゝをふゝき人ハかるなりとよめる末句句如何

たに人(の)心にまかせすもかなと此心にて

上三句ハ哥をなかめてわかたねをし

らハやと侍りおしはかりなれと左勝歟

四十番

左 隆信朝臣

「 33ウ

2478 戀せしのみそきもいさや夢にたに

みたらし河のわすれかたミを

右 内大臣

2479 あけくれハなれしむかしをわすれつゝ

ゆめかとのミそおもひなさるゝ

左哥は戀せしとみたらし河にせしみそ

き神ハうけすも成にけらしもと申す

歌につきて戀せしのみそきとよむ

事侍れと戀せしのとよむことはうけ

られぬ詞に侍りたゝ心うつくしう

戀せしとよミ侍らはやとふるき人も申

侍き右哥ハ業平朝臣これたかのみこのもとにと

「 34オ

しころまかりかよひけるにかしら

おろしてひえさかもとにおのと申所に

うつりゐられたるに正月にとふらひ

にゆけりけるに雪いたうふりて物

さひしけに侍ける彼室にいたりて

をかむにつれくとしていと物かなしかり

けれハかへりてつかハしける哥也その

心をとりてさりけなくていもせのなか

らひによミなされてあはれもふかく

侍に左哥つねの事にてめもおとろ

き侍らねは右をや勝と申へき

四十一番

「 34ウ

左 有家朝臣

2480 たちかくりくれまつほとひるまたに

なくく袖をしほりつるかな

右 忠良卿

2481 戀をのミしつやのこすけ露ふかミ

かりにも袖のかはくまそなき

左 哥ひるまたになくく袖をと侍う

ちまかせたるつゝけ様にてかみには

ひるまなしといひしもにはねをな

くよしにそへつゝけたるよろしき

哥侍らねと源氏物語などにハいつく

にか身をはすつらん白雪のかゝらぬ

山もなくくそゆくなどよめるほどおほ

かれハとかめ侍らす右哥神楽のしつや

のこすけの哥につきて露ふかミかり

にも袖のかはくまなしなどはおかれ

「 35オ

侍るに戀をしつと侍ことはふるくい

とみえ侍らす戀をすまなと侍めりさ

れとちかころはかく侍めれハひとりい

かゝと申さんハ避事にてそ侍へき

勝負定申かたし

四十二番

左 保季朝臣

2482 おほかたを涙にくらすゆふされは

思ふはかりのなかめたにせず

右 兼宗卿

2483 なきなかつ涙もわれをいとへはや

身をはなれてはおつるなるらん

左 歌はあしくも侍らぬに詮とせられた

るふしやいかゝ千載集源明賢哥二

なけきあまりしらせそめつることの

はも思ふはかりはいはれさりけりと

侍下句にやかよひて侍らん一詞も舊

詞をハ晴にハさるへしあまた句なれ

「 35ウ

と指事なきをハとかむるにおよハす

といましむる事なれハ申侍もおほゆる

程事を申さねはしらさりけりともわ

たくし侍ともかた／＼そしり侍ければ申

侍也右哥ハ涙も我をいとひてや身をは

なれてをつらんと侍あしからすぎこえ

侍れハ右勝と申へし

四十三番

左 良平

2484 さ筵やあたりさひしきねさめして

夢のわかれも露けかりけり

右 通光卿

2485 おのつからあふ夜あらはのあらましも

思たへぬる身のおもひかな

左歌ふるまへるすかた優に侍り右哥

心をかしく侍れハ持にてや侍へき

四十四番

左 具親

2486 むすひけるあさき契のほとみえて

あかてわかるゝやまの井の水

右 釋阿

2487 みちのおくあらゝまきのごまたにも

とれハとられてなれゆくものを

左哥ハむすふてのしづくにゝこる山井

のあかても人にわかれぬる哉とよめる

歌のなかにこそまちかくきゝなれて

あさき事と思侍へし右哥ハみちの

おくあらゝまきのごまによせられたれ

はおくふかく心にくゝいしるにむすふて

のしづくにゝこるかけよりもあたち

のこまのあしハやくかちふちうちまか

せてやさしく侍らん

四十五番

左 顕昭

2488 昔より人のうへにもおもひきや

戀にうきなをとゝむへしとは

「 36ウ

「 36オ

「 37オ

右 俊成卿女

2489 うちかへしかさねし袖をかたしけは

「 37ウ

それかとにほふたまぐらのそて^露左哥心と申し^ミことはにつけてさせる

ところも侍らす右哥心たくみにすかた

たへにしてふるき判の詞にいとく

をかしなんとほめられたれハかゝる

哥をほめられたる詞にやとぞ思ひ

あはせ侍勝と申につけてもかたハラ

いたく侍へし

四十六番

左 女房

2490 おきのはに身にしむかせはおとつれて

こぬ人つらきゆふくれのあめ

「 38オ

右 越前

2491 人ならはおとろかすなといひてまし (歌頭に○印)

こゝろもしらぬおきのうはかせ

左哥上句には萩のはに身にしむ風

おとつれさせ下句にはこぬ人つらき

ゆふくれの雨とはへるこそ不堪紅葉苔^青

地又是涼風暮雨天と侍白楽天の作

れる詩までも思あはせられて戀の

なさけもよをされ侍けんと思やられ侍

れ右哥下句心もしらぬ萩のうはかせ

と侍も夏衣またひとへなるうたゝね

に心してふけ秋のはつ風とハよみて

こそは侍めれことはりよむ哥ハすこ

しもきかひ侍ましきか左勝侍へし

四十七番

左 左大臣

2492 くりかへしたのめてもなをあふ事の

かたいとをやはたまのおにせん

右 定家朝臣

2493 おもかけはなれしなからの身にそひて

あらぬこゝろのたれちきるらん

左哥ハかたいとをこなたかなたにより

「 38ウ

かけてあはすはなにをたまのおにせん
と侍哥にてひとふしおかしくむすひな

「 39 才

されて侍右哥は深心はしり侍らねと
ひとへにあらまし事みなくさりあは

やら

れてまことすくなき躰にやふるき

哥よミの中にも贈答の哥屏風障子

の哥歌合哥などはみなやうかはりて

おなし哥よミなれとえぬかたへたるかな

ひとすちならすと申心たへて侍れと申

事も侍歟左ハたしかにはみえ侍れ

はつよしと可申侍

四十八番

左 前権僧正

2494 つみしらはむくひを思へはなかたミめ

「 39 才

めならふ人ハひとりならぬを

右 通具朝臣

2495 とへかしなおはなかもとのおもひ草

しほるゝのへの露はいかにと

左哥ハ花かたミめならふ人のあまた

あれハわすられぬらんよすならぬみハ

と侍歌のさまにこそ侍れ右哥ハ万葉

哥に道のへのおはなかつたのおもひ草

いまさらになとも思ふへきと侍哥のむ

ねこしをとりてさらに上句をよみ

かへられて侍めりこれはいちすこし

右すゝみにや侍らん

四十九番

左 公継卿

2496 みちのくのいつしハはらのいつかわれ

かへるあしたの露はらふへき

右 家隆朝臣

2497 ときしもあれなとあなかちにつらからん

あきはゆふくれ月はありあけ

左哥ハ万葉に道のへのいつしはゝ

らのいつもくゝ人のゆるさんことをし

またんと侍哥の上三句のうち第三

「 40 才

句のいつもくをいつかわれと下二句

を後朝哥によくかへなされて侍めり

「40ウ

右哥ハ下句にあきはゆふくれ月は

ありあけと侍はさきにも注申秋の

ゆふへはあやしかりけりの哥もしは

ひとりぬるところは草はにあらねとも

秋くるよひはつゆけかりけりと申

哥の心か又月は有明とハそれさきに

いたし申あか（ふ）つきはかりうき物は

なしと申す哥歟いかさまにもこの下両

句のありさまよくよミすゑられたり

とおほえ侍らすあきはたゝゆふまく

れこそたゝならぬ萩のうは風萩の

下露なとこそけにとおほえ侍れ以左

「41オ

為勝

五十番

左

公経卿

2498
うらミハや人をも身をもあさきりの

やへたつなミの秋をしそ思ふ

右

雅経

2499
やとるとて月になミたをまかせても

くちなはいかに袖のしからみ

左哥ハまたしらぬ暁露におきぬれて

やえたつきりにまとひぬるかなこれは

狭衣哥と承に此哥の心ならば朝霧

のやえたつ浪の秋と侍はいかによまれ

「41ウ

て侍にかも浪と雲とをまかへてよみ

侍は露と浪とをもあひにせてよま

れ・侍にや右哥もさきに申すいせかやとる

月さへぬるゝかほなると申哥にくちな

はいかに袖のしからみなとよミそへられ

て侍ともに思ハれたるところよく侍

れと左の朝霧のやえたつ浪なを

きゝつかぬ様におほえ侍れは右を

勝と申へし

五十一番

左 季能卿

2500 おきつ浪あらゐのいそのいはにおふる

「 42オ

まつにもにたる袖のうへかな

右 寂蓮

2501 おもかけはくもるそらたにある物を

うたてくまなくすめる月かな

左哥ハくさかけのあらゐのさきのかさ

しまをミつゝや君かやまちこゆらんと

よめる哥万葉に侍れハあらひのいそ

も侍らんいふとさきとハかよはしてよめる

ことおほしとしまかさきともしまか

いそともよめり右哥ハいつしかとくれ

をまつまのおほそらはくもるさへこそ

かなしかりけれと申哥の心にや後拾

「 42ウ

遺に隆家卿哥さもこそはミやこの

ほかにやとりせめうたて露けき草

枕かなとこれハ只三文字なれともおき

所かはらねはこの詞によりてきよら

にきこゆ又ふるしとも申つへし

但あまりの事か詞つかひなどよろし

くミゆれハ右まさるとも申侍ぬへし

五十二番

左 宮内卿

2502 から衣うちぬるほかのゆめちにも

人にうらミをむすふ成けり

右 家長

2503 さよ衣かさぬる事のなきてのみ

なミたに袖のくちやハてなん

左歌指科みえ侍らぬに夢路と申事ハ

なくては只夢と許よまれても侍ぬへく

やさきにも此由申侍にき但あまりの事

にこそ右哥ハさよ衣かさぬる事のなき

てのミと侍上の詞によらは無下いふ心下の

なミたによらはねをなくとよめりされ

と舊物語などに侍れはとかく申かたし

哥合ハ物語などの哥にハにるへくも侍ら

「 43オ

ねはなきてのミの詞いかゝときこえ侍
れハ左勝と申へきか

「43ウ

五十三番

左 讚岐

2504 くもるさへうれしかるへきそらならハ

なミたのあめもいとほさらまし

右 三宮

2505 うとかりしもろこし舟もよるハかり

そてのみなとをあらふしらなミ

左哥ハ先の五十一番の右哥に申上侍

ぬるくもるさへの哥にきこえ侍りぬ右

哥ハいせ物語におもほえす袖にみな

とのさはくらしもろこし舟もよ^すせる

はかりにと侍哥の上の下句とりかへ

「44オ

られて侍なをしかれと詞つかひなと

あしからねはさて侍なん左歌もひと

ふしハ侍と猶右哥下句のそてのみなとをあらふは持と申すへし

五十四番

しらなミなどふるまハれて侍れハ
勝侍へし

左 小侍従

2506 まつやともとふのすかこもとはゝこそ

なゝふをあけてぬともしられぬ

右 内大臣

2507 なかむれは心さへこそうきくもや

そのいにしへのゆふくれのそら

左哥みちのくのとふのすかこもならふ

にはきミをねさせてとふにわれねん

と申哥にてよまれたるかかみのく

にとふとよミて下句にならふとよめる

やまひには侍らすや又とのすかこもと

はゝとそへられたるはこのこもなら

すともその証ハ定勤てそよまれて

侍らん右哥ハ源氏物語に君もさハ

あはれをかはせ人しれすわかみに

しむる秋のゆふくれと侍哥の心にやあ

しくも侍らす左病侍れハ負侍へし

五十五番

「44ウ

左 隆信朝臣

2508 あけぬとてはかなくしのふなこりかな

「45オ

あふとしもなき夢のちきりを

右 忠良卿

2509 まちしころまちならひにしゆふくれは

またれぬときもなをまたれけり

左哥ハ上にハかなくとよミて下にあそひふと

しもなきと侍れは病也右ハかゝる詞

つかひの哥も侍うへに左病侍れはう

たかひなき右勝歟

五十六番

左 有家朝臣

2510 たれもみなうきをハいとふことはりに

しらすはこそは人をうらみめ

「45ウ

右 兼宗卿

2511 あさゆふになれゆく君かおもかけは

つらきこゝろのほかにやあるらん

左哥ハことはりはきこえたれと詞

くたけてや侍らん右哥ハ風情よろし

く侍れハ為勝

五十七番

左 保季朝臣

2512 つれなさはなをかはらてや山しなの

おとはのやまのおとにたつらん

右 通光卿

2513 あふ事はゆめにのミこそならひきて

うつゝともなきこよひ成けり

左哥やましろの音羽山のおとにたに人の

しるへく我戀めかもこれハ山しなのおとハ

の山とあるまゝにつゝけておとにたに

とそへたり和泉式部か哥かへるさを

まち心みよかくなからよもたゝにては山

しなのさとゝそへたりこの左哥ハつ

れなさはなをかはらてややましなのと

侍はいはれぬつゝきにや右ハさるふし

は侍らねは為勝

「46オ

五十八番

左 良平

2514 あひミてもなこりおしまのあま人は

けさのおきにそ袖ぬらしつる

「 46ウ

右 尺阿

2515 あやなしや戀すてふなはたつたかは

そてをそくるゝくれなひのなミ

左哥ハまつしまやおしまかいそにあさ

りせしあまの袖こそかくはぬれしか

と後拾遺の哥にて本侍りそれにて後朝の心を・右哥ハちハや
よまれてけさのおきにか袖ぬらすなどそへられて侍
ふる神よもきかすたつた河からくれ

なひに水くゝるとは是は業平哥也

又此哥をよミそへて侍めりあやなく

てまたきなきななのたつたかはわ

たらてやまん物ならなくにと申哥を

とりあはせてたくみに戀哥をつく

りていたせり左哥もよろしくみえ侍

れハ勝負難定申とや定申へき

五十九番

左 具視

2516 あかすしてわかるゝなミたそてにこそそふ

なをしのゝめの道しはのつゆ

右 俊成卿女

2517 思いてゝなきこそわたれあき風に(歌頭に○印)

ちきりしそらのはつかりのこゑ

左哥ハあかすしてわかるゝ涙瀧にそふ

水まさるとやしもはみるらん是ハ仁

御門みこにおハしましける時に
和の・ふるの瀧御覽してかへり給け
るに兼藝法師かよめる也わかるゝ涙

瀧にそふを袖にそふとよミ水まさる

とやしもはみるらんをなをしのゝめ

の道しハの露とよミうつしたること

のほかにものあさくや右哥ハ思いてゝ

戀しきときハはつかりのなきてわ

たると人ハしらすや是ハしのひにか

たらへる人のいゑのあたりを(そ)まかるを

「 47オ

「 47ウ

りにかりのなくをきゝてくるぬしか(や)

よめる也左なをしのゝめいかゝときこ

ゆれと右ハ本哥と心も詞もたかは

ぬ様に侍る仍為勝集

六十番

左 顯昭

2518 さきの代のちきりありけるとハかりも

みゆるほとなることのはもかな

右 丹後

2519 あひミてもこゝろのハるゝひまそなき

かへるそらにはうちしくれつゝ

左哥指めつらしきふしは侍らね

と戀心侍めり右哥帰朝の心も侍ぬ

へし勝と申へきにや

六十一番

左 女房

2520 うつゝこそぬるよひくのかたからめ

そをたにゆるせゆめのせきもり

右 定家朝臣

2521 思いてよたかきぬくかのあつきも

わかまたしのふ月そミゆらん

左哥ハ人しれぬわかゝよひちの関守ハ

よひくことにうちもねなゝんと侍哥と

あかてこそ思ハん中はハなれなめそ

をたに後の忘かたみにと侍る哥と二と

をとりあはせられてめてたくこそ

侍れまことに庸才(を)はけむともおよふ

へからす俗骨くたくともかなふへからす

こそみえ侍れ右哥ハしのゝめのほからく

とあけゆけはをのかきぬくきるそか

なしきと申哥にわかしのふ月そミゆ

覽とはよミそへられて侍れと秀逸

にはみえ侍らねはぬうへに月字かきなりて侍以左為勝

六十二番

わかるゝ身なれハ同心の病に(や)ハあらすきよからす
ともあか月とよミならハしたれハ・仍以左為勝

左 左大臣

「 48ウ

「 48オ

「 49オ

2522 くらしつるひはすかのねのくさまくら

かはしてもなをつきぬよはかな

右 通具朝臣

「 49ウ

2523 いまこんとちきりし事はゆめなから

みしよに、たるありあけのそら

左歌ハ待くらす日はすかの根におもほ
えてあふよしもなとたまのおならんと

申哥に菅枕をたちいれられてたよ

りおかしくとりなされて待めれまねひ

哥ハかやうに侍へき也かはしてもなを

つきぬよはかなと侍すかまくらと尤よ

まるへく侍りけり右哥いまこんといひ

しはかりにと申哥にとりかゝるへくハ

おなしくハあり明の月ととちめられ

なんそらも僻事ならねとふたつにと

らはの事に侍りか様の事ハ人の

このミくゝに侍れと存する様を申侍也

されと哥すかたあしからねは右哥可勝歟

「 50オ

六十三番

左 前権僧正

2524 我袖にやとるならひのかなしきは

ぬるゝかほなるよはの月かけ

右 家隆朝臣

2525 きよミかたわかゝよひちのせきなれや

うちぬる人もなミたのよるく

左哥先にも申侍やとる月さへぬるゝ

かほなると侍哥のかミのめつらしく

なりて侍にこそ右哥ハいせ物語の哥に

人しれぬ我かよひちのせきもりはよひく

ことにうちもねなゝんと侍哥につきて

かよひちのせきもりをきよみか関に

なしてうちぬる人も浪のよるくゝなとよ

まれてめつらしく侍れハ勝申へし

六十四番

ほ 左 公継卿

2526 あひなくもしくれのおともつらきかな

「 50ウ

まつ人のこぬよはのねさめハ

右 雅経

2527 かへしてもむなしきとこにしほるかな

「 51才

うらミはてつるよはのさころも

左哥ハことほりもきこえてよろしく

みたまふるに初句のほいなくもと侍お

ほつかなく侍つねにはあやなくもとこそよ

み侍めれもしひかゝきにや侍らん規子内

親王の野宮哥合に有忠か女郎花を

よめる哥くらふ山ふもとのゝへのおみなへ

し露のしたよりうつしつる哉とよめ

るを源順判申云有忠かさかのをすき

てくらふ山にてもとめありきけんも

あいなしと詞にて書て侍めれそれも

又あやなしを事たかへて侍やらん

「 51ウ

又あちきなしとかける本も侍めり

とにかくにおほつかなく侍り右哥ハ指

ことはみえ侍らすされと左哥のかきた

かへをうけ給て勝負ハ申へく侍ひか

かきをおさへてまくへしとうたへに

うすことは左右ゐかれてはしたなく勝

負をあらそふ・の事に侍り

六十五番

左 公継卿

2528 つくくとおもひあかしのうら千鳥

なみのまくらになくくそきく

右 寂蓮

「 52才

2529 たかさとの露をは袖にはらふらん

よもきのもととはかせにまかせて

左哥浪の枕になくくそきくと侍は

人のきくことをち邊千鳥歟のなくに

そへられ侍か又ちとりのなくにはあら

て思あかしの浦千鳥をあはれにた

えすして人のなくくきくと侍にもや

おほつかなく侍り右哥ハ源氏よもき

ふのたつねても我こそとハめ道もなく

ふかきよもきのもとの心ハと侍哥の心歟
本哥にふかきよもきのもとの心と侍

れハいかにと申にはおよひ侍らねと

「52ウ

よもきのもととは風にまかせて侍つゝ

きいかゝとこそおほえ侍れさりながらも

左の浪の枕に泣くそきくと侍れは

ちとりにも聞人にもかよひていかゝと

おほえ侍れハ右のよもきのもとのつゆは

わけゆく袖もしほれまさるへくや

六十六番

左 季能卿

2530 あひミてものちつらからんうきなをハ

とめぬいのちにかへんとそ思ふ

右 家長

2531 うちしほれ露のミふかきおもひくさ

しもにしられてとしハへにけり

左哥ハ常にハ逢にハ命をかふとこそよ

みならハして侍れ命やはなにそは露

「53オ

のあた物は逢にしかへはおしからなく

に人しれす逢を待まに戀死はなにゝ

替たる命とかいはんかやうによめるに左

哥ハいのちにかへんともいはれすしてあ

はれなはかしこき事にてあるを後

つらからんうきなのとまらん事を今

にかへんと思ハれん事ハいかゝはせんとめぬ

命にかへんとよまれたる事のはのつゝ

きの心へられぬいかゝ右哥ハつゆのミふか 「53ウ

き思くさにてしもかゝる事もなくて

としふる心よろしく侍り左の向いのちか

へのひとすちならぬには勝侍なん

六十七番

左 宮内卿

2532 とへかしなしくるゝ袖の色にいてゝ

人のこゝろののあきになるミを

右 三宮

2533 こゝろこそひとかたならすまよひぬれ

つりするあまのうけならねとも

左哥さる事とみえ侍り右哥ハ伊

勢の海につりするあまのうけなれや

心ひとつを定かねつると侍哥にあま

りにたかハすや侍らんもとすゑの詞の

取ちかへられ侍給にこそされは左

六十八番

歌可勝侍歟

左 讚岐

2534 なミた河せきやるかたやしかの海うらの

みるめはすゑもたのミなければ

右 内大臣

2535 やましろのこまのうりうの世のなかや

ならしはゝてゝ人のつれなき

左哥ハふるき哥二をとりあはせて

よまれ侍にやはやきせにみるめ

おひせは我袖の涙の河にうへまし物

をみるめこそ近江の浦にかたからめ

吹たにかへよしかの浦風かやうの心は

「 54オ

「 54ウ

ともに侍か右哥ハ山しろのこまのわた

りのうりつくりとなりかくなりなる

心かなとよめる哥の心にてこまのうりう

の世中やなとおかしくよミなされて侍へ

し左哥いますこそし哥合の哥にハ勝侍／なん

六十九番

左 小侍従

2536 たえもせしなかめなれともおりからに

しのふもまたそくるしかりける（り）

右 忠良卿

2537 身のうさは人のつらさをしるへにて

なミたのやとはたもとなりけり

左哥たえもせしなかめハつねの事

なれハ忍戀のおりのなかめのくるし

からん事ハ申くらふへきにあらすや右

哥ハ上下句ともにたゝうちあるさま

の事には侍らすことのほかによそほ

ひかたくみえ侍りまさると申侍へし

「 55オ

七十番

左 隆信朝臣

2538 我戀ははかなき^{ユメ}こひのねさめかハ

みるにつけても袖のぬるらん

「 55ウ

右 兼宗卿

2539 いつまてかおもひミたれてすくすへき

つれなき人をしのふもちすり

左哥指科みえ侍らす右哥ハ河原

左大臣哥にみちのくのしのふもちすり

誰ゆへにミたれそめにし我ならなく

にと侍哥の心にてふし／＼よろしくよミ

なされて侍れハきゝなれたる心ちも

つかうまつり侍にや共に指事は

みえず難ハ侍らねハ持と申へきか

七十一番

「 56オ

左 有家朝臣

2540 なミたしもせきやハあへむゝすひをく

水もゝらしのちきりたかはゝ

右 通光卿

2541 あひミてもすきにしかたのつらさをは

わするへしとは思はさりしを

左哥ハなとてかくあふ事かたきみに成

にけん水もらさしとちきりし物をと

侍哥の心なからあふ事かたミのことハなと

はあなかちにとられすとも侍^ぬへかり

けり水もらさしの契の詞や心よからす

きこえ侍らん右哥あしくも侍らねと

また勝たる心もみえ侍らねハ同程と

七十二番

申侍へし

「 56ウ

左 保季朝臣

2542 袖のうゑにこゝろのいろはしるければ

さすかにあさき思とはみし

右 釋阿

2543 おもひいてよわすれやしぬるわかさちや

のちせのやまとちきりしものを

左哥袖の上に心の色しるしと侍にさ

よとはみえ侍れとなをかゝる涙などハ
申さまほしくや右万葉にとにかくに

人はいふともわかさちののちせのやまの

「 57オ

のちもあはん君と侍哥のこしよりしも

をよミうつされなから頭尾の両句をいミ

しくこそよミおかれて侍れかやうによし

あしも申かたく侍れと勝負申さす侍

も恐ふかく侍れハ申侍也左哥もあし

くも侍らねとなを右ハつよくおほえ

侍れハ勝と定申

七十三番

左 良平

2544 露の身のそのあかつきにきえすして

たゆるうらミにむすほゝれつゝ

右 俊成卿女

「 57ウ

2545 まつとたに人はわするゝさむしろに

いく夜かさねて袖のかたしき

左哥うちとけてのゝちにつらからん心

くるしきにはさもおほえ侍ぬへし

右哥ハさ菴に衣かたしきこよひもや我

をまつらん宇治の橋姫と侍哥につき

て宇治の橋姫といふ其名をハかくして

まつとたに人はわするゝさ菴などハおかし

くみ給にむすひの句の袖の片敷こ

よひもやとよミかけて侍れハこそきゝに

くからねこの袖の片敷ハおよはぬ心にか

たふかれ侍り仍左をもて勝とす

「 58オ